

あれから321年

一般社団法人

# 中央義士会報

創立明治41年

令和6年12月発行 No76

## 目次

- ・一般社団法人として活動を開始.....編集部.....1
- ・理事挨拶.....矢野英樹、能瀬英和、宮川政士、関根正隆.....2
- ・「岡本元朝日記」史料批判(二).....蟹江元.....4
- ・去年以来志浅深之次第.....柿崎輝彦.....7
- ・中央義士会理事会北海道北泉岳寺にて開催.....松岡康彦.....9
- ・福本日南墓前供養祭.....進藤務.....10

## 一般社団法人として活動を開始

令和五年十二月十四日、一般社団法人中央義士会として、東京法務局に届けを提出し、受理認可されました。令和六年四月一日から、新会計年度を開始し、他の業務も一般社団法人としての活動を開始しました。

中央義士会は、明治四十一年に福本日南によって創立され、昭和八年に財団法人として活動を開始しました。以後平成二十年の法人制度改革により、平成二十二年に財団法人を返納するまで、七十七年間活動を行ってきました。

その後、任意団体としてそれまでと同様に、活動を続けてきましたが、活動の継続と各種事業を行うにあたり、任意団体では限界があることから、一般社団法人として新たな出発を行うことになりました。

これまで続いてきた伝統は継続し、新しい事業にもチャレンジしていきます。

三月、十二月の泉岳寺での「浅野内匠頭追憶の会」と「穂義士追憶の集い」については、これまで通り継続。ただし、参加人数は以前の三十〜五十名から百二十名に大幅増加しています。

毎年一月下旬に行っている「引揚げコースを歩く会」は、令和四年から運営をツアー会社に委託してきました。これらさらに一般社団法人からの委託ということになり、法人対法人の契約となりました。もともと安全には細心の注意を払っていました。さらにツアー会社のプロの管理により安全性はますます高まりました。途中での昼食も各自取っていたのですが、レトランを利用するようになり、利便性も上がりました。

月一勉強会も泉岳寺様の講堂を使用させていたたくことにより、以前の定員三十名から七十名に大幅アップしました。月一勉強会の名も「忠臣蔵講座」としてリニューアルし、月に一回から隔月開催としました。また、講座もプロジェクターの使用など、新たな方式も採用し、より分かりやすい講座

- ・R7年1月26日引揚げコースを歩く会.....柿崎輝彦.....11
- ・R7年忠臣蔵講座.....萩原栄.....12
- ・「正史元禄赤穂事件」刊行.....柿崎輝彦.....13
- ・日本消防会館に忠臣蔵碑が完成.....萩原栄.....14
- ・業務報告.....進藤務.....15
- ・検定試験始まる、新人会員、編集後記.....柿崎輝彦、編集部.....16

になつていきます。

年に二回、高輪台小学校の生徒の皆様、授業の一環として行われている、泉岳寺の忠臣蔵関係の見学会の案内も協力させていただいております。

新しい事業として、泉岳寺様より依頼のあった、義士墓域におけるガイドも始めました。土日限定ですが、常時二、三名の会員が墓域を訪れる方々に、説明と質問に答えております。外国からのお客様もいらつしやいますので、外国語ができるガイドも揃えました。

さらに今年から、忠臣蔵検定試験も始めました。一次中断していましたが、以前とは受験方法を変更し、全国各支部での受験ができるようになりました。七十五点以上の方には、一般社団法人中央義士会公認の、「忠臣蔵講師」の号を授与し、今後の外部からの依頼のあるガイド派遣や、当会主催のイベントのガイド、また、講演会などにも講師として活躍していただく予定です。

以前から行っていました。大石内蔵助らの切腹地での説明ガイドも続けています。特に春は、地元町会とコラボし、また十二月には日時を限定していますが、いずれも泉岳寺からの道筋案内と、切腹地での説明を行っています。さらに切腹地の清掃ボランティアも行っていきます。

六月二日には、一般社団法人としての、最初の社員総会を開催し、これまでの経緯と会計報告、ならびにこれからの方針を説明させていただきました。出席された社員の皆様から、いづれの議題にも賛同いただき、また、暖かいご声援をいただきました。

なお、一般社団法人として新たな郵便口座と銀行口座が必要となりましたので、取得し使用を開始しております。これまでの郵便口座と銀行口座は停止しましたのでご注意ください。新口座番号は、各種イベントの案内に記載しておりますので、そちらをご利用下さい。

今後新たな事業として、忠臣蔵文化の発展、研究成果の社会への還元などにも注力していきますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

編集部

## 理事挨拶

赤穂支部支部長 矢野英樹

平素から皆様には大変お世話になっております。中央義士会播州赤穂支部長の矢野英樹です。播州赤穂支部は、赤穂藩主家菩提寺である台雲山花岳寺内に事務局を置き、私は花岳寺にて総代会会長を務めております。

中央義士会赤穂支部は、地元赤穂市内において、市が運営する赤穂義士会、赤穂大石神社さんが運営する赤穂義士顕彰会とともに、赤穂の歴史的財産であり、故郷の誇りである四十七義士をはじめ、赤穂の先人たちをたたえ、後々に語り継ぐための活動をしております。具体的には毎月第二日曜日に「忠臣蔵雑学会」といった講座を開いて、市民の皆様にわかりやすく勉強会を開いたり、近隣に多数存在する縁の地を訪問しております。また当山片山住職と泉岳寺松根住持とは学生時代の先輩後輩になられるそうで、中央義士会が赤穂に支部を作りたいという話も、松根住持が中央義士会常務理事をされておられることをうけ、片山住職が「では花岳寺にて播州赤穂支部をお受けしましょう」ということになった次第です。

東京では外国人の方が泉岳寺に多数訪れておられるようですが、故郷赤穂には、日本人の観光客の方もめつきり少なくなりました。昨今の忠臣蔵離れが進む中で、今後も精一杯故郷の誇りを守りながら、後世に伝えることに努めてまいりたいと思っておりますので、今後ともご指導いただけますようお願い申し上げます。

## 理事挨拶

京都支部支部長 能瀬英和

平成十年六月、地元京都市西京区に父、当時理事長念願の特別養護老人ホーム「まほろば」が完成しました。当時の地元有力者の方々から設立を勧められ、又、超高齢社会の到来にそなえ、「特別養護老人ホームにこだわりを持って、生まれ育った大原野灰方の地につくりたい」そんな私どもの熱意を理解し、大変なご尽力を頂いた当時の京都市長、民生局長そして各方面の先生方にあらためて敬意を表したい。

今でもあの時のことを思い出して、ご恩に報いなければいけないと必死で高齢者福祉に取り組んでまいりました。その当時、私が心に思ったことは、「この道より我を生かす道なしこの道を歩く」たしか武者小路実篤の言葉ではなかったか。

福祉とは少数の恵まれない人々の為の事業ではない。誰にでも何らかの理由で思いがけないハンデイを背負う可能性があり、老いと共に心身とも障害を持つことにもなる。自分自身は健康であっても、家族の誰かが何らかの障害を負ったり、高齢に伴うハンデイを持つかもしれない。福祉は全ての人の問題であり、社会全体の幸福をもたらすものでなければならぬ。誰もが必要な時に必要なだけの社会的サービスを受けられる介護保険制度、この介護保険がこれからも皆様に十分受け入れられるよう、取り組んで行きたいと思えます。

私自身、赤穂義士子孫の会に入会しています。相談役の富岡様、理事長 柿崎様から中央義士会京都支部を設立の折、支部長のお話をいただき参加さ

せていただくようになりました。今後ともよろしく  
お願いいたします。

## 理事挨拶

—中央義士会と山鹿支部—

山鹿支部支部長 平成堀内組 宮川政士

私が中央義士会と出会ったのは、仕事で品川プリンスホテルに宿泊していた時でした。

学生時代、大崎に住んでいた私は毎日卒論に忙しく部屋に籠もりきりでした。

宿は二泊目、地図で近場の泉岳寺を発見、子供の頃、祖母に連れられて芝居小屋、八千代座で観た「忠臣蔵」の老家があるではありませんか。

朝食もそこそこに出かけていくと、さすがに身が引き締まる思いがいたしました。

色々お話を聞いてみると、あと三年で「刃傷松之廊下」から三百年とのこと、全身烏肌が立ちました。そしてその事業の為に募金をしているとのこと、心ばかりですが気持ちを添えて、この時中央義士会に入会いたしました。（この募金が義士のお墓の横に掲示してあります）

それから上京の度に、泉岳寺におまいりと勉強会には参加いたしました。

そして、多くの方、多くの事を知るうちに私だけが知っていてもいけないと気づき、仲間を集めることにしました。

赤穂市へ姉妹都市締結の直談判に向かった当時の市長、合併時の市長、県議、市議会歴代議長、副議長、日輪寺住職、八千代座支配人等々、私の関わりのある方々に声をおかけしました。

最近では、堀内家との縁戚になる坂本哲志衆議院議員にも入会いただきました。

そして、名称を決めるのに「熊本義士会」「山鹿義士会」など考えましたが、山鹿には元々「堀内組」として、義士遺髪塔を守ってきた組織がありました。順番に交代でお米を作り、その売り上げで、義士遺髪塔や、伝右衛門ご夫婦の墓守りをしてこられました。私もこれに感動し、又、堀内伝右衛門の顕彰は山鹿でしかできないと思い「平成堀内組」と命名しました。

そうこうしているうちに、堀内家ご子孫の堀内研一様にお会いすることができました。お手紙を書き、お宅を訪問すると、思った以上に奥様共々、暖かく優しく迎えていただきました。

午前中で帰る予定が、お昼をごちそうになり、結局夕方暗くなるまでお話を聞きました。

百三歳でお亡くなりになるまで、私の良き師匠であり、良きおじいちゃんでした。

そして、存在が市民の方々へ知られてくると生涯学習講座、生涯大学、八幡小学校六年生の日輪寺の説明等がありました。

八幡公民館講座では、コロナ期間中ではありましたが、休むことなく毎月一回、四年間続きました。受講者の皆さん、大変熱心で、堀内研一さんから教わった所を实地見学にも行きました。

立田山の伝右衛門隠居地跡、花園小学校の義士が使った手水鉢、その他、久留米草野歴史資料館、八女の寺坂吉右衛門の墓参り、細川家、今も釣瓶井戸が残る伝右衛門住居跡、実際に見ると当時のことを想像し、熱いものがこみあげました。

当然赤穂との交流も盛んになり、平成十三年十一月「忠臣蔵旗剣道大会」に中学生を引率して以来、剣道は元より、野球、柔道、合唱の交流が続きました。又

翌十四年に姉妹都市も実現し、交流が密になりました。ロータリークラブも友好ロータリー、青年会議所も姉妹JCとなりました。

又、日本遺産に山鹿は「米」、赤穂は「北前船」で認定を受け、翌年、赤穂は再び「塩」で日本遺産の認定を受けました。

「米と塩」で浮かんできたのが、落語の米朝事務所でした。「桂米團治、桂塩鯛」両師匠にお願いし、赤穂と山鹿で「塩（えん）むすび」の落語会を開催しました。赤穂高校より手作り塩、城北高校より米を交換しておむすびにして来場者、関係者にお配りし、喜ばれました。

令和八年には堀内伝右衛門三百回忌を迎えます。忠臣蔵サミット、シンポジウム、供養祭、忠臣蔵展そして浪曲などを企画、予定しています。楽しい一年、そして、市内外に忠臣蔵と堀内伝右衛門をよく知っていたら機会にしたいと思います。

## 理事挨拶

### 新潟支部支部長 関根正隆

新潟支部長に就任いたしました長徳寺住職の関根正隆と申します。

新潟支部となります堀部安兵衛武庸の生誕地・新潟県新発田市では「武庸会」が大正二年から堀部安兵衛をはじめとした赤穂義士の顕彰を続けております。長徳寺は、堀部安兵衛の生家である中山家の菩提寺であり、安兵衛の父、中山弥次右衛門の墓所があります。また、平成二十五年に武庸会が結成百周年を迎えたことを機に安兵衛を地元・新発田に里帰りさせたいとの声が高まり、泉岳寺様の墓所、花岳寺様の遺髪塔より土を分けていただき、平成二十九年に長徳寺の境内に安兵衛のお墓が建立されました。

大石主税、堀部安兵衛を含めた十名が切腹を遂げた伊予松山藩邸が現在はイタリア大使館となっていることから、切腹した場所の土をいただくことができました。そして今年十月十八日には、ベネッセイ駐日イタリア大使に長徳寺にお越しいただき、大使に切腹した終焉の地の土をお墓に納めていただくことができました。

今は、「忠臣蔵」と言っても知らないという若い世代が多い現状ですが、三百年以上、日本人を惹きつけてきたストーリーです。関係する地域も全国各地に点在し、イタリアとのお縁まであります。私はこれまでとは、光のあて方を変えていけば、もっと注目が集まるはずだと考えております。今後は皆様と連携して活動してまいりたいと思いますので、ご指導の程、よろしくお願いいたします。



新発田市長徳寺堀部安兵衛墓

## 『岡本元朝日記』史料批判(一)

蟹江 元

前回は「梅津忠昭日記」に疑問を投げかけたが吉良・佐竹等の立場から検証してみる。

天気について「梅津忠昭日記」は晴とあり『易水連袂録』は陰天とある。『史料纂集神田橋護持院日記』は「昨日朝より九ツ時まで雨降り、その後陰曇夜に入り又雨降り、七ツ時より雨止み、四ツ時より天晴れ、風も無く暖気なり」とある。曇りから晴れたとしていて、天気についてはニュアンスが異なっているので留保せざるを得ない。

さらに親族関係について探る。佐竹義隆の子で当主義處の嫡男修理大夫義苗(よしみつ)室は、紀伊大納言光貞の娘育姫だった。義苗は元禄十二年に死去してはいるが、上杉綱憲の室栄姫は育姫の妹だったので当時の各家の当主紀伊徳川綱教・佐竹義處並びに上杉綱憲は姻族である。また、元禄十二年に上杉民部大輔吉憲と佐竹義處が口宣(くせん)の対象となり吉良義央が上使の時に申請が行われ、江戸城でその儀が義央も同席で行われた。こうしたことで音信が行われ、そのまま続いていた。こうしてみると綱教・義處と義央は親しい時期があったのは間違いない。とりわけ綱教は実は事件現場松之廊下の上の間にいたので事件に遭遇しているわけだから、十四日当日、佐竹当主近侍の大嶋重為が江戸城御殿にいた紀伊徳川家留守居役あるいは吉良家臣から情報入手があったとみることもできよう。あるいは吉良義央邸を見舞った当主と大嶋が入手した情報

であったとみることもできる。これは赤穂浅野家の江戸城御殿にいた留守居役からの確な情報があればと仮定すると同じではあるが、それでも佐竹同家内で情報に差があるのは違和感が残る。

赤穂義士が吉良邸に討ち入り、上杉では兵を出すか評議中に綱教の名代附家老水野土佐守重上(しげたか)新宮水野家三万五千石」と佐竹修理大夫(修理大夫義苗は死亡しているので侍従・大膳大夫になつていた義處か義格(よしただ)が駆けつけ慰問し、その際に出兵しないよう忠告したと「上杉家の躊躇」『元禄快拳録』にある。そうこうしている間に上杉家に幕府から畠山基玄が使者として来たため出兵は沙汰済みとなったとされる。筆者はこの出典を把握できていないがこの三家の関係が顕われてはいるだろう。

俳句の視点から探ってみる。梅津半右衛門忠昭は俳号其雫(きてき)。宝井其角の門で白雲洞などと称した(「足立矩水井上隆明他・秋田俳諧史」『出羽路第39号』)。宝井は水間沾徳門下の義士門人との交流もあったようで、与謝蕪村の『新花摘』によると其角が梅津に宛てた書簡を見たことがあり、そこには四十七士と記され子葉・春帆などを「我凡辺(きへん)になれて風流の壯士」とあつたと記述している(「蕪村と義士俳人一件・偽簡の発端」『俳句忠臣蔵』)。其角は元禄十六年三月四日には沾徳、午寂(其角門人 幕府番医師林家儒官の人見香山)、凍雲、横儿などと追悼句会を行っている。其角が梅津に宛てた日はこの書簡が所在不明のためわからないが、刃傷事件でも其角門人から情報を早く得ることもできたことを示している。実は義士の本格俳

人は十指にあまり当然刃傷事件以前からの沾徳あるいは桑岡貞佐(ていさ)の門人作者だった。

ついで「梅津忠昭日記」の原本・抜書の所在不明について探る。先述の『平沢通有日記』は元禄十二年閏九月二十一日から元禄十五年にあたる日記四が欠けている。また『平沢清右衛門日記抜書』が別であり、この抜書は江戸が東京に変更された明治以降の抜書であることが分かっている。日記四の抜書のあとにその原本は所在不明となつてしまった。同様に根拠薄弱ではあるが「梅津忠昭日記」の刃傷記事も存在したが元禄赤穂事件に興味持つ人物の抜書ののちに原本・抜書とも所在不明となり新聞記事のみ残つたと推察できるかもしれない。

とはいえ、この資料の事情を考慮すれば、史料としては限定的にしか扱えない。なお「小林輝久彦・幕府高家・吉良上野介」『上杉と吉良から見た赤穂事件』は重為が正確なのに比べて渋江光重の情報が不正確で、だから刃傷事件関係を述べた全体が不正確と「梅津忠昭日記」を論証に使うのは、文書を一次史料だけの厳密なものに限る従来の立場と自ら不整合となるだろう。

(三) 刃傷の一原因として風説として挙げた宿坊豊表替について

『岡本元朝日記』五月二十七日、刃傷の一原因として秋田に戻った義處の江戸話を記した。従つて渋江光重の情報ではない。江戸家老梅津忠昭と大嶋重為も殿様に随行して秋田にいた。「十五日の増上寺参詣に際して宿坊の表替は必要か長矩が義央に尋ねたところ、馳走は伝奏屋敷であり、立ち寄り先については無用と答えた。長矩も父(祖父が正しい)

の代の先例を調べて無用と判断したが、前日の十四日に老中の阿部豊後守正武に義央が尋ねると、新しくするのも馳走人の仕事で取り替えよとのことで、義央が長矩に伝えた。長矩は老中に尋ねるのなら、私がやった。吉良殿が教えたことを自分で聞いて直すのは余計なお世話だ。既に登城して明日のことを変えられてもというが、義央が馳走役は、諸事そうしないと務まらないと返したので、これが意趣の原因かと取沙汰している」というのだ。

当該日記五月二十七日条を次に転載する。

(略)

江戸御はなしの内に先日申来候吉良上野介殿之事御はなし也、所ハ御広間より白書院へ之廊下也、次第如前間候、内匠殿取候衆ハ鹿近十郎左衛門と申衆の由、「鹿近殿コレハ御覚アママリノヨシ、後間候へハ名ハ与三兵衛」、之ハ奥様衆の由、この人上野殿へ間候事ありて中腰になり被間候由、上野殿は立候て被申候由、其処ヲ内匠殿うしろより上野殿系ほうしの上一刀切候、不通時上野殿ふり向候ヲ、二太刀め二系ほうし切おとし候時ひたい二少切入候へ共うす手の由、其処ヲ取候由、上野殿様子はあしくさた申候由、

又風説二ハ内匠殿前度公家衆御馳走被 仰付候時分上野殿へ御間候は、毎度 公家衆上野増上寺へ御出候、宿坊之たゞミ表替ハ如何と御申候へハ無用二候、てんそう屋敷御馳走二候、公家衆被参さきく迄左様之事前度わきくの衆も不覚と被申候由、又内匠殿父之代三十年以前も御馳走被成候由それ二も其通之由、然故尤とさしおかれ候由、然者三月十五日うえ野増上寺へ公家衆御こしノ筈二御座候時、前

十四日二 御城二て上野介殿内匠殿へ御申二ハ、先日之たゞミの事豊後殿へ尋候へハ其ためノ御馳走なり、新敷可被仕事なりと御申候と被申候と被申候由、其二て内匠殿御申二ハ、老中へ尋筈二候ハ、我等可申候、其ヲ御自分御申候二ハ及さる事なり、其上さる二より前度二申候、其節可承事ならハ可承候二其節ハ右之ことと御申候て今日左様の事如何仕候、今日ハ如此 御城二居候、明朝之事何と可成候哉と御申候へハ、上野殿御申ハ諸事しハく被成候てハ御馳走も不成物二候と被申候由、此意趣二可有之とさた申候由、

(略)

梶川が鹿近(かじか)と伝わっている。存在したとされる「梅津忠昭日記」では留守居番梶川與惣兵衛とあり出所がどちらも佐竹義處のはずだが岡本の聞き間違いがあった。また梶川が義央に対して中腰で礼をとっていたとある。

豊表替えについて中央義士会は「中央義士会の歴史認識」『中央義士会会報第68号』の歴史認識10で「吉良義央のいじめレポート」の中に豊表替はあった。『寺坂私記』に予定であった記述があり、最近『岡本元朝日記』で証明される」とした。

豊表替について『異議あり忠臣蔵』は、宿坊の豊替營繕そのものが、御馳走人の役目には無いとして否定した。さらに『誠忠武鑑』に、十一日から十二日のこととして見えるので、出所は、この記事の背景にあったことだろうとし、十二日に勅・院使が將軍と会う重要な日に御馳走人と高家に揉め事が起こることは考えられない。まして十四日など刃傷事件が起きていてこんな事件が起きることは

ない」と否定した。『誠忠武鑑』は、宿坊を参詣歸路の休息所として御馳走役宿坊とのみ記しており、門扉壁などの修繕は済んでいたが豊表まで修繕していなかったということになっている。実は増上寺の塔頭観智院が勅使の休息所であったため豊表替が行われたとなれば、この寺院である。

馳走人の役目について、休息所の維持管理まで含まれるのだが、相手方が馳走対象ならば、營繕でも馳走人の役務の対象に組み込まれた可能性は高い。また『誠忠武鑑』は後世の成立だが、「赤穂鐘秀記」『赤穂義人纂書』に或説として増上寺の豊表替が日付はないがほぼ同じ内容でみえる。『岡本元朝日記』にも義處の江戸話として書かれたということとは当時豊表替が流布していたということである。「寺坂吉右衛門書捨之寫」『赤穂義人纂書』にも十四日に増上寺之公家衆装束所にて豊表替と障子張替があったことが述べられている。

『岡本元朝日記』は十四日とあり、長矩は既に登城して、ここから早朝指示して、そのあとに刃傷になったわけだから豊表替は、実は長矩が緊急に家臣の江戸留守居役に指示して、始めた作業となる。老中ともある人物が前日に指示するのか疑問もある。また、増上寺参詣についてはこの年は高家肝煎畠山基玄と高家職品川伊氏ならびに寺社奉行兼奏者番永井直敬の担当で義央は月番ではあるが寛永寺を担当し増上寺は外れていた。『岡本元朝日記』も増上寺を上野として混乱している。豊表替が事実としても義央は月番として長矩に伝えただけで、当時の勅使儀礼に対する絶大な指導力を背景に義央のみが悪者になったのではないか。本来は畠山・

品川が老中に対して意見具申して取りやめる責務を負っていたはずである。晷表替について、義央に近い存在の秋田佐竹当主の義處が語るところに真実性を垣間見る。また、この晷替えの話は正確な情報入手といわれた梅津忠昭も大嶋重為も知っていることに留意が必要だろう。

これについて、「小林輝久彦・松の廊下事件」『上杉と吉良から見た赤穂事件』は「殿中の所作については、事前に書面で伺書を提出して、高家に添削を受けられるものであって、口頭で遣り取りするものではない。従ってこの話は、御馳走人の役議の実務を知らない階層が作話したものであって、口頭で遣り取りするものでない。これも事実として認められない」とした。そこで義央と書面での遣り取りをしていた例（足守木下家文書「公家衆御馳走初中後之覚」について『大倉山論集第64輯』）として挙げる備中足守の木下肥後守公定について確認してみたい。天和（てんな）二年（一六八二）長矩が朝鮮通信使馳走人となったときの相方であり、このときの諸々の所作は、書面によるお伺いが為されていることが『冷光君御傳記』に明らかである。長矩十六歳のときだった。この時は、伺いを高家ではなく奏者番水野右衛門大夫忠春に出しているので管轄窓口は奏者番だった。このことについては研究が必要である。しかし、老中久保加賀守忠朝に口頭で聞いている場面がある。伺書があるから口頭は無かったとはいき切れず現に公定その本人が朝鮮通信使馳走に際して口頭で処理しているわけである。原則を踏まえつつも口頭で対応することはあったことになる。

(略)

其他何角御伺有之八月四日公定君被仰合 大久保加賀守忠朝君へ御越口上二而左之通御伺被成則指圖有之御歸懸公定君同道水野忠春君へ御出被仰置

(略)

とあり、二つ質問して大久保が口答したことが詳しく伝えられている。これ以外は御付札を以御指圖有之で処理された。諸事どうするか御伺に対して先年中川・相良が相務めたので参考にすべく付紙で指示されたりしている。赤穂は堀部弥兵衛が責任者で赤羽根十左衛門、石田庄六、願野伊右衛門の名がある。

それでも長矩が元禄十四年に書面の遣り取りを怠ることは、別の事情がない限り有り得ないのである。長矩が口頭となったときされるのは、この晷替えと「赤穂鐘秀記」『赤穂義人纂書』には十四日の勅使登城のときも昨日同様玄関で迎えて作法とるべきか義央に尋ねて、いまさらの場当たりのお尋ねと嘲笑し、そこを行き過ぎ声高で、それで馳走人かと思したとある。この年は、通常の伺書手続のみで出来なかつた要因、義央の江戸帰府が二月月末ならば、義央は二月月番山と引継を二月中に行い異議を唱え引継内容を無効として三月月番から自分の方針で行う名分を作った。長矩が既に二月月番と交渉し決めていた経費節減を強硬に唱えれば、事態が混乱し、それは通常の伺書手続のみで進行することだけでは無理な状況となったとみることができ。宿坊晷表替は書面で処理できない迫った異常さがよく表れている。

今回入手できる資料・史料により『岡本元朝日記』の分析を試みた。

なお、今号は十二月発行なのでこの『岡本元朝日記』の元禄十五年十二月二十三日条を次に転載する。

(略)

此次第二候故、内匠殿家来衆主人の敵二候と存入ねらひ候由、然処二今月十四日夜半時、吉良左兵衛殿（上野介殿子息也）屋敷中へ忍入、人数十四五人にて上野介殿を討留、子息左兵衛殿へ手負せ、其外家人共をも討候て、右之首共手々二持候て立退候由、此御飛脚立候処へ申来候間、不取合先申越候、追て委細承可申越由書付指越替事二存候、

(略)

とあり、飛脚を立てるところだったのでとりあえず一報し、委細は後日と急報した様子である。この書は江戸の梅津与左衛門忠経からで委細は二十一日に到着している。梅津忠経は渋江光重の兄にあたる人物で梅津忠昭は既に在国していた。梅津・渋江の両家は親族だったのである。

(参考文献)

- 中島康夫・元禄赤穂事件の記録 易水連袂録・忠臣蔵倶楽部 1974  
坂本正仁校訂・神田橋護持院日記・八木書店2010  
福本日南・元禄快拳録・岩波文庫1940  
出羽路第39号・秋田県文化財保護協会1969  
夜半亭蕪村・新花摘・俳書堂1916  
復本一郎・俳句忠臣蔵・新潮社1981  
平沢清右衛門日記抜書（秋田県公文書館）  
中央義士会会報第68号・中央義士会2016  
飯尾精・異義あり忠臣蔵・新人物往来社1993  
堀部次郎・誠忠武鑑・文昌閣1909  
鍋田晶山輯録・赤穂義人纂書・国書刊行会1910  
冷光君御傳記・傳記附録（広島市立中央図書館）  
大倉山論集第64輯・大倉精神文化研究所2018

## 去年以来志浅深之働之次第

柿崎輝彦

大石内蔵助が残した史料の中に「去年以来志浅深之働之次第」がある。四十七士の名前が羅列されているだけのものだが、重要なのはその順番である。いわゆる考課表なのである。

浅野内匠頭の後室瑤泉院付用人だった落合与左衛門が記したとされる江赤見聞記（巻之五）に記載されており、元赤穂浅野家医師で浅野家改易後京都に居住していた寺井玄溪にも送られている。

その順番とは、赤穂浅野家改易後から紆余曲折の大変な時期を共に乗り越え、仇討ち決行に至るまでの四十七士等の功（志浅深）に関する序列である。

あくまでも大石内蔵助一個人の主観とはいえ、このような史料を敢えて大石が残したことに驚きを隠せない。討入り直前に大石自らが一同に発した訓令の中に、「一、敵を討取候者も 警固一通りの者も 亡君への御奉公は同一に候へば其の間に功の軽重を置かず 従つて組合并に勤務の上に 異議を唱へ申す間敷事」とある。全く理解に苦しむ。どちらを先に記したかは不明であるが、何とも人間臭さが漂い如何にも大石らしいとも言える。

順位については別表の通りで、大石は自らを一位として次に原惣右衛門、吉田忠左衛門、

間瀬久太夫と続き最後尾四十七番目に寺坂吉右衛門とある。

この「去年以来志浅深之働之次第」は昭和四十五年に発行された「赤穂義士の手紙」（片山伯仙編著）に紹介されており、著者の片山伯仙（当時赤穂花岳寺住職）が後書きに註として、感想を付してあるのでその一部を紹介しておく。

通観して考えられることは、大石に親近したいいわゆる上方衆に甘く、江戸衆に辛いようである。特に感ぜられる点は、間瀬久太夫の事績が多く伝わっていないので、何ゆえに屈指の第四番という幹部級に挙げられたかの疑問、第八の大高源五は十分にうなずけること、第二十六、七、九の堀部親子、奥田ら江戸急進派に辛く、殊勲ありと思える赤城盟伝組（前原・神崎・木村）の三士が不評であったこと、特に長矩の寵臣といわれていた片岡、磯貝ら、返り新参組（十一月十六日付小野寺十内状）に、頗る酷であったこと等々である。然し之はあくまでも大石独自の考えに基づくもので、誰と相談されたものでもない。・・・これあるを知らぬ後人が書くとなれば、又別の考えがあるろう。

とまれ同志等は誰一人としてこれあるを知らず、従容として自刃したのであるが、万一在世中これが洩れていたとすれば、果たして義挙が完遂されていたであろうかの虞さえ感ずる。

別表は「去年以来志浅深之働之次第」に「討入口上書」の順位を併記したものである。両書

の順番を横並びにし、比較すると大石の思惑や心情など様々なものが浮かび上がってくる。

上位には大石の側近等が占めているが、元あたりが大石の凄いとところである。

次に注目に値するのが、やはり上位の一五番目に記されている間十次郎である。部屋住みでありながら既に活躍（一番槍）を予期していたのか、対討入口上書の順位がプラス三八である。

また、前出の片山伯仙も指摘しているように、全体的に江戸詰に厳しいようであるが、その中で上位に位置付けられているのが村松喜兵衛（対討入口上書プラス三三）三太夫（同四一）親子である。この二人についての手柄話しや逸話は極めて少なく疑問に感じる方も多いと思われるが、赤穂浅野家改易以降最初に江戸から赤穂を目指したのが村松親子であった。着穂するやいなや大石に従順の意思を示したことに大石は感激したと伝わっている。

一方で木村岡右衛門は赤城盟伝で不義の臣等の行績を憤註し、高僧盤珪禅師から頂いた「英岳宗俊居士」の法名を金短冊に記し勇ましく討入りに参加したものの、慎重な人柄でこれといった功績もなければ落ち度もない。しかしながら江戸下向後は大石と反りが合わなかったとされる堀部安兵衛や毛利小平太、小山田庄左衛門、中村清右衛門、鈴木十八等の脱盟者と同居しており、当初は義盟に加わら

ず身の振り方を曖昧にしていたことが最後まで尾を引いたのか、最下位から二番目の四十六番(▲二二)と極めて評価が低い。

同様に序列が低かったのが、四十七士の中では旧家禄が大石に次ぐ二番目の高禄だった片岡源五右衛門で四四番(▲四〇)にその名が見える。浅野家では側用人で児小姓頭、浅野内匠頭とは特別な関係にあった人物である。片岡は磯貝十郎左衛門や田中貞四郎らと浅野内匠頭の遺体を田村邸から引取り泉岳寺に葬ると早々に赤穂に向かった。すでに赤穂城内会議で出された「花岳寺での自決」に異を唱え「我等は格別の者であるから切腹などしない、吉良殿を討つこと以外は考えていない」として大石と反目した。結果として片岡等の主張通り仇討ちが決行されたが大石は厳しい評価を下している。

このように、当たり前のことではあるが、大石は早い時期から自身に心を委ねた者に対して高く評価したようである。

総じて新参者に評価が厳しかったのは理解出来るとして、気になるのが部屋住み組の序列である。四十七士の中に部屋住みは十人含まれているが、評価が分れている。部屋住みとは、家禄を継ぐ前の段階で未だ直参ではないことから、本来評価対象外である。それが二百石の上級武士で馬廻役の富森助右衛門や堀部安兵衛よりも上に六人が名を連ねている。家老の伴大石主税や実父が二百石だった岡野金右衛門はさておき、現代の会社組織で例えるなら、アルバイト社員が部長クラスより業績評価が上ということになる。絶対にあり得ないことである。

全体を俯瞰してみると、巷間で活躍したとされる堀部安兵衛(▲一三)、磯貝十郎左衛門(▲二五)、不破数右衛門(▲二二)、赤埴源蔵(▲二二)、片岡源五右衛門(▲四〇)や一族の大石瀬左衛門(▲二二)への評価がかなり厳しく、逆に下級武士であっても上手く立ち回った大高源五(二〇)や武林唯七(二〇)などを高く評価している。大石が初めて仇討ちを宣言した岡山会議に父親の代理として出席した部屋住みの岡野金右衛門(八)と矢頭右衛門七(一六)を高く評価しており、大石が心打たれ、早い時期から大石の思い通りの活躍を果たした人物を上位に

しているようである。しかしながら、この「去年以来志浅深之働之次第」が討入り前に発覚することを想像すると背筋が凍りつく思いである。

「去年以来志浅深之働之次第」と「討入口上書」の順位比較

A							B							B-A	
順位	氏名	年齢	役職・家禄	譜代	討入口上書順	順位差	順位	氏名	年齢	役職・家禄	譜代	討入口上書順	順位差		
1	大石 内蔵助	44	家老 千五百	○	1	0	25	三村 次郎左衛門	36	台所小役人 七五二人扶持	○	46	21		
2	原 惣右衛門	55	足輕頭 三百石	○	3	1	26	堀部 安兵衛	33	馬廻 二百石	新参	13	▲13		
3	吉田 忠左衛門	63	足輕頭 二百石	○	2	▲1	27	奥田 孫太夫	56	武具奉行 百五十石	新参	15	▲12		
4	間瀬 久太夫	62	大目付 二百石	二代	5	1	28	横川 勤平	36	蔵奉行 五両三人扶持	新参	44	16		
5	小野寺 十内	60	京都留守居 百五十石	○	6	1	29	堀部 弥兵衛	76	郎唐 (江戸留守居三百石)	○	9	▲20		
6	大石 主税	15	部屋住	部屋	7	1	30	富森 助右衛門	33	馬廻 二百石	○	11	▲19		
7	湖田 又之丞	34	郡奉行 二百石	○	12	5	31	倉橋 伝助	33	扶持奉行 二十五五人扶持	○	31	0		
8	大高 源五	31	厩物方 二十石五人扶持	○	28	20	32	奥田 貞右衛門	25	部屋住	部屋	39	7		
9	中村 勘助	44	馬廻 百石	○	20	11	33	磯貝 十郎左衛門	24	側用人 百五十石	新参	8	▲25		
10	武林 唯七	31	中小姓 十五両三人扶持	○	30	20	34	不破 数右衛門	33	元馬廻 百石	浪人	22	▲12		
11	近松 勘六	33	馬廻 二百五十石	○	10	▲1	35	矢田 五郎右衛門	28	馬廻 百五十石	○	16	▲19		
12	村松 喜兵衛	61	扶持奉行 二十五五人扶持	○	32	20	36	赤埴 源蔵	34	馬廻 二百石	○	14	▲22		
13	村松 三太夫	26	部屋住	部屋	41	28	37	神崎 与五郎	37	横目 五両三人扶持	新参	42	5		
14	間 喜兵衛	68	勝手方吟味 百石	○	19	5	38	前原 伊助	39	金奉行 十石三人扶持	○	35	▲3		
15	間 十次郎	25	部屋住	部屋	38	23	39	大石 瀬左衛門	26	馬廻 百五十石	○	17	▲22		
16	早水 藤左衛門	39	馬廻 百五十石	○	18	2	40	吉田 沢右衛門	28	部屋住	部屋	26	▲14		
17	岡野 金右衛門	23	部屋住 (二百石)	部屋	25	8	41	間瀬 孫九郎	22	部屋住	部屋	36	▲5		
18	小野寺 幸右衛門	27	部屋住	部屋	37	19	42	杉野 十平次	27	中小姓 八両三人扶持	○	33	▲9		
19	千馬 三郎兵衛	50	馬廻 百石	○	23	4	43	茅野 和助	36	横目 五両三人扶持	新参	43	0		
20	岡島 八十右衛門	37	中小姓 二十石五人扶持	○	29	9	44	片岡 源五右衛門	36	側用人 三百五十石	○	4	▲40		
21	勝田 新左衛門	23	中小姓 十五石三人扶持	○	34	13	45	間 新六	23	部屋住	部屋	45	0		
22	菅谷 半之丞	43	馬廻 百石	○	21	▲1	46	木村 岡右衛門	45	馬廻 百五十石	○	24	▲22		
23	貝賀 弥左衛門	53	蔵奉行 十両二石三人扶持	新参	27	4	47	寺坂 吉右衛門	38	足輕小頭 五石二人扶持	部屋	47	0		
24	矢頭 右衛門七	17	部屋住 (二十五五人扶持)	部屋	40	16									

江戸註 太字は岡山会議・隅田川船中会議参加者(35名) 堀部安・湖田は重複

※ 役職・家禄は赤穂義士実録(斎藤茂著)参照 ※ 年齢は討入時(数え年)

部屋 は部屋住 浪人 は閉門後浪人



## 中央義士会理事会

## 北海道北泉岳寺にて開催

松岡康彦

北泉岳寺皆上泰信住職が中央義士会北海道支部長兼理事に就任してから令和5年は数回泉岳寺講堂開催の理事会に出席。理事会審議の中で年に一回は本部以外で理事会開催を検討してもよいのではとの話になり検討を重ねた結果、まず令和6年6月に北泉岳寺で開催することにしました。本部支部の各理事の予定を調整した結果6月15日(土)北泉岳寺で理事会を開催することと決定。

6月14日(金)千歳空港集合。6月16日(日)同解散で各理事日程の調整を開始。熊本山鹿支部長宮川政士理事。播州赤穂支部長矢野英樹理事の代理で目木敏明支部顧問。京都支部長能瀬英和理事。本部富岡克相談役 柿崎輝彦理事長、山北浩史監事それと専務理事の松岡康彦が出席することになりました。14日(金)は福岡、神戸、伊丹、羽田空港からそれぞれ出発。14時に千歳空港に集合し前泊地富良野に向かい、皆上泰信理事と合流。これで全理事集合になりました。前泊地富良野で理事会開催。理事会では特に宮川政士理事から令和8年8月に「堀内伝右衛門300回忌」と「忠臣蔵サミット」を開催するので、中央義士会理事の皆様にもご協力をお願いしたいとの要請がありました。理事会後各理事同士の懇親を深め、翌日砂川市北泉岳寺を訪問。北泉岳寺は1953年に泉岳寺から

墓の土をもらいうけて47土のお墓を建立し、以後は12月14日に雪中の義士祭を開催しているお寺です。1990年には第2回義士サミットが開かれました。当日は本堂で法要後47土のお墓をお参りし、北の地から赤穂義士を鎮魂しました。北泉岳寺内では北海道義士会総会に出席。総会后柿崎輝彦理事長から、中央義士会の説明と赤穂事件についての講演が行われました。理事長はプレス空知新聞への取材に対し「いつかは来たいと思っていた砂川の北泉岳寺。すばらしい環境でお寺の思いが伝わります。北海道の皆さんと交流ができて良かったですし、今後の活動に活かしたい」と話していました。

北海道義士会の増井浩一会長からは「中央義士会初の地方理事会が北泉岳寺になったのはうれしい。北海道支部も盛り上げていきたい」との談話がありました。境内での懇親会には砂川市飯澤明彦市長も馳せ参じていただき、北海道義士会の人脈の広さを感じ嬉しいうりでした。播州赤穂支部目木敏明顧問は「北泉岳寺での若い人達との面談で、義士達の忠誠心・勇氣・誇りが色褪せることなく大事にされている事に感懐し、12月の雪中での義士祭を理解出来た」との感想でした。京都支部能瀬英和理事は「赤穂義士の墓所が砂川市にあった。『宿意あり』恨みを込めた叫びを発しながら内匠頭は上野介に斬りつけた。北の大地に主君の恨み、と私も大声で叫びたい気持ちになりました。素晴らしい墓所におられ安心しました」とのこと。

北海道支部理事会は4空港から離着陸して集合開催し解散となりました。人が集まるのには皆の気持ちを一つにしないとできないと強く感

じた次第です。赤穂義士47人の気持ちが一つになって12月14日迄たどり着けたのは、内蔵助の殿内匠頭への想いとやり抜く意志はもろんのことですが、47土の殿への忠義心があったからこそだと、強く感じた北泉岳寺での理事会でした。皆上泰信理事3日間大変お世話になりました。感謝です。



境内にて北海道義士会幹部の皆様と



北泉岳寺義士墓域 大石内蔵助墓石前

福本日南翁墓前供養祭と

忠臣蔵絵巻内覧会の開催について

進藤 務

令和六年九月一日午後、台風十号による雨の合間を縫って福本日南翁墓前供養祭が執り行われました。

まず泉岳寺本堂にて松根大地住持による厳かな読経から始まり参加者はそれぞれ焼香に進んで福本日南翁の冥福と中央義士会のますますの発展をお祈りしました。続いて松根大地師の講話があり、明治四十一年福本日南はどのような気持ちで中央義士会を発足されたのか。人は時間がたつと初心を忘れがちであるが何事も最初が大切。松根大地師ご自身も初めて泉岳寺の山門をくぐった時のことを思い出されるとの由。初心を忘れないこと、自分を見誤らないことが大切との言葉がありました。本堂でのご焼香の後、一同供養墓に移動して再度読経、それぞれご焼香を行いお開きとなりました。

小休憩の後、講堂に移動して忠臣蔵巻物の内覧会を行いました。この忠臣蔵絵巻物を所有しておられる酒井陽太氏は、前泉岳寺住職の小坂機融師と幼馴染であられたとの由、その関係で小坂機融夫人小坂政子様のご紹介で今回絵巻物を公開する企画が実現したもの。絵巻物は酒井氏が知り合いの方からもらい受けたもので全三巻、

夫々十メートルはあろうかという長さで忠臣蔵の名場面が注釈をつけて描かれています。忠臣蔵ファンなら絵の脇に書かれてある人物名を読むだけでその場面のストーリーを想像できるという内容です。藤井氏によると作者不詳でそれが描かれた経緯や背景なども不明とのことでしたが、当日参加者は貴重な資料がみられるというのでいささか興奮気味、柿崎理事長がコメントをつける絵巻の部分を得ながら食い入るように見入っていました。



本堂での法要



福本日南碑前の供養



忠臣蔵絵巻物鑑賞会

# 忠臣蔵愛好会のご案内

## 赤穂義士引揚げルート歩く

恒例の「赤穂義士引揚げルート歩く会」を下記要領にて開催いたします。  
中央義士会が長年検証してきた結果、より史実に近いコースを歩きます。  
参加者は全員トラベルイヤホンを着装し、歩きながら説明を聞き、昼食もセットされている  
安心快適なツアーとなっております。是非ともこの機会にご参加くださいませ。  
尚、昼食会場の都合上、お申込み受付は先着60名様までとさせていただきます。

- 日時：令和7年1月26日（日） ※雨天中止、小雨決行。  
集合：9時00分 JR総武線 両国駅 西口改札付近 時間厳守  
出発：9時30分  
16時00分 泉岳寺到着予定
- ルート：両国駅 ～ 永代橋 ～ 築地本願寺 ～ 田町 ～ 泉岳寺 約12km
- 主な立ち寄り地：（途中、随時トイレ休憩をとります）
  - ①吉良邸跡（本所松坂公園）
  - ②播州赤穂浅野家上屋敷跡（聖路加国際大学）
  - ③西本願寺（築地本願寺）  
※昼食休憩（予約済み会場）
  - ④陸奥仙台松平家上屋敷跡（日本テレビ）
  - ⑤御田八幡神社
  - ⑥高輪泉岳寺
- 説明：中央義士会会員
- 会費：5,000円（税込） ※昼食代含む  
当日、別途資料代を徴収します（コピー1枚につき10円）
- 申込：株式会社阪急交通社 ナビダイヤル 0570（08）9600  
《受付時間》月～金曜日／9:30～17:30 土日祝／9:30～13:30  
ただし、土日祝は電話受付のみとなります  
インターネットなら24時間ご予約受付

‘阪急交通社’で検索 コース番号：3A140K

以上

企画協力 一般社団法人中央義士会  
後援 NPO法人忠臣蔵倶楽部 ・ 全国義士会連合会  
企画実施 株式会社阪急交通社

※ご出発当日緊急連絡先 0570-08-8911  
(株)エアサーブ羽田空港支店（委託） 6:00～15:00

## 令和7年忠臣蔵講座 「地図を持ち街へ出よう」

これまで年に5回泉岳寺講堂において勉強会を行ってきましたが、令和7年は、街へ出て忠臣蔵を現地で学びます。各回、2～4Km程度歩きます。

令和7年の講座は、外で行うためプロの旅行社に管理をお願いします。それにより、説明員の話がよく聞き取れるようヘッドセットの用意、万一のための保険など万全の体制で臨みます。

### 1. 刃傷事件の現場

日時 令和7年2月23日(日) / 集合 13:00 解散 16:00 予定

集合場所 東京駅丸の内北口団体集合場所

呉服橋(刃傷事件当時の吉良邸跡)－伝奏屋敷－大手門－皇居東御苑(刃傷事件の場)－平川門(浅野内匠頭、吉良上野介が駕籠で出た門)

### 2. 内匠頭切腹の地並びに義士自訴の地

日時 令和7年4月6日(日) / 集合 13:00 解散 16:00 予定

集合場所 JR新橋駅 蒸気機関車の前

田村邸跡－源助横町(片岡源五右衛門ら潜伏地)－消防会館(仙石伯耆守邸)

### 3. 討入りの地

日時 令和7年6月1日(日) / 集合 13:00 解散 16:00 予定

集合場所 JR両国駅西口改札付近

堀部安兵衛旧居跡－杉野十平次旧居跡－吉良邸表門－吉良邸裏門－前原米店跡－回向院－両国橋

### 4. 討入り口上書はいかにつくられたか 8月は暑いので泉岳寺講堂の冷房の効いている室内で講座を行います。

日時 令和7年8月3日(日) 13:30～15:30

場所 港区高輪泉岳寺講堂

内容 萱野三平と討入り口上書について

### 5. 46人切腹の地

日時 令和7年10月5日(日) / 集合 13:00 解散 16:00 予定

集合場所 港区高輪泉岳寺

旧細川家下屋敷跡(大石内蔵助ら17名切腹地)－松平隠岐守屋敷跡(イタリア大使館 大石主税、堀部安兵衛ら切腹地)－六本木ヒルズ(毛利甲斐守下屋敷 岡島八十右衛門ら切腹地)なお、水野監物屋敷跡(田町駅前)は、距離の都合上行きません。

[参加費] 金額は別途

・会員 5回分一括 〇〇〇〇円 1.2.3.5.回は各回 〇〇〇〇円 4回は1,000円

・一般 5回分一括 〇〇〇〇円 1.2.3.5.回は各回 〇〇〇〇円 4回は1,500円

[申込]

下記宛てに郵便局から青色の払込取扱票で、参加費をお振り込み下さい。

**一般社団法人中央義士会 00140-8-674575**

主催 阪急交通公社 企画 一般社団法人中央義士会 協賛 NPO法人忠臣蔵倶楽部 全国義士会連合会

連絡先メール chuogishikai@tokyo.email.ne.jp TEL/FAX 03-3630-1927 担当 萩原

## 「正史元禄赤穂事件」刊行

柿崎輝彦

このたび、真実の忠臣蔵「正史元禄赤穂事件」のタイトルで泉岳寺限定の小冊子が刊行された。泉岳寺松根住持様から、史実の元禄赤穂事件を簡単に知ることが出来る読み切りの冊子を泉岳寺で販売したいとのご依頼を受け、史実を忠実に反映させ、かつ事件を時系列に簡潔（九〇頁）に纏めた冊子を執筆した。

発刊を記念して、一般会員の皆様方には各一冊ずつ贈呈させて頂いた。通常価格一冊八〇〇円（税込）が、会員の方は会員特別価格七〇〇円（税込）でご購入いただける。詳しくは中央義士会ホームページをご参照下さい。



令和元年に発行した拙著「忠臣蔵の起源」（幻冬舎ルネッサンス新書）の中で、やはり史実だけにフォーカスした章を取り上げたが、今回はより多くの方に読んでいただきたいの思いから、読みづらい漢字には出来る限りルビを振るなど、専門的な記述を交えながらも親しみやすいようにブラッシュアップさせていただいた。

これまで元禄赤穂事件（忠臣蔵）に関する書籍は数え切れないほど刊行されてきたが、中でも史実に特化した書籍においては、当時の史料文献や古文書など信憑性や信用度の高い資料を底にしていることから、研究には適しているものの、候文や旧仮名遣いなど現代の日常生活とは異なる文体や文字の資料が多く掲載され、読みづらいうえに専門性が高く判りづらく、しかも頁数が嵩張ることでは読み切れず、結果として大方が頓挫しているのではないかと拝察する。

一方、芥川龍之介、武者小路実篤、船橋聖一、海音寺潮五郎、大佛次郎、吉川英治、池波正太郎、森村誠一、井上ひさしなど多くの作家が元禄赤穂事件と向き合い作品にしてきた。

それぞれが文豪らしく、それなりに造詣が深く、個々の切り口や視点観点で登場人物の思いや考えを綴っており、全てが感動的な大作に仕上がっている。しかしながら、小説はあくまでも小説であり、

文豪等の感性鋭く登場人物の思いに寄り添った描写も真実とは言いきれず、その思いを補填するかのよう、架空の人物を登場させるなどフィクションとして空想に拡がりを見せ、文豪等の完成度の高い世界感に浸った読者等が、恰もそれらが真実であるかのように同調同感し刷り込まれてきた。

勿論、小説以外に映画やドラマからの影響も大きく、長い年月をかけて、フィクションと実際の元禄赤穂事件は複雑に交錯しながら密接な関係を築きつつ忠臣蔵は発展してきた。

今回執筆した真実の忠臣蔵「正史元禄赤穂事件」は、敢えて世間一般に知られているドラマや映画の場面や描写を避け、より史実に忠実に事実だけを時系列に淡々と紹介させて頂いた。とくに後半は切腹以降の出来事を紹介することを心掛けた。現在、土日祝を中心に泉岳寺の赤穂義士墓域において中央義士会会員がガイドをしているが、忠臣蔵を良く知る参拝者等も切腹以降について知る人はまれで、殆どの方が初めて知ったと言われる。

史実の元禄赤穂事件を理解するには、是非この機会に一気に読みされることをお勧めする。そして、どんなドラマよりも史実の方が感動的であることを実感していただきたい。

# 日本消防会館に忠臣蔵碑が完成

荻原 栄

今年の九月に公益財団法人日本消防協会の日本消防会館が新しく完成した。港区虎ノ門二丁目にあった日本消防会館は、元禄赤穂事件の際に、討入り後引揚げ途中で、吉田忠左衛門と富森助右衛門が自訴した大目付仙石伯耆守邸のあった一帯に建っていた。それもあって、旧館には赤穂義士足洗の井戸と義士のモニュメントが建てられていて、忠臣蔵ファンには必見の場所でもあった。また、同館にはニッショウホールも併設されていて、各種公演などが行われているので、一般の方にもなじみ深い会館である。

それが同じ場所に新しく日本消防会館が建て替えられ、同時に以前のモニュメント等は新しく碑に造り替えられた。

造り替えるに当たり、当会に声がかかった。令和二年七月、筆者も含め当会の幹部数人が日本消防協会を訪問したところ、これまでのモニュメント形式は止めて、一枚の碑にしたいので、その製作への協力依頼であった。当会としても是非協力させていただく旨返事をし、早速原案作成にとりかかった。まずは原案を筆者が作成し、それを日本消防協会に同行した会員にレビューしてもらい、改訂したものを送りました。製作の途中で、文字の一部変更があり、また、絵を二枚使用したが、カラーできれいな絵にするため、筆者の持っている原本をお貸しした。

完成の連絡があったので、十月の初めに日本消防協会に伺い、碑を見せていただいた。ご丁寧にも、会長の秋本氏と建設事業部長の小松氏が応対して下さい、碑にも案内していただいた。

碑は消防会館の南面の壁に埋め込まれていて、写真でも分かるように、回りを緑のツタが囲んでいる。碑の前に団体でも十分に見ることが出来るスペースもある。横にはベンチもあり休めるようになっていて。当初聞いていた碑の大きさは横1メートル程度とのことだったが、実物は2メートルを超える大きなもので、絵はセラミックのきれいなカラー版、迫力のあ

る碑である。今後観光名所として有名になることが期待される。

二枚の絵は「誠忠画鑑 赤穂義士引き揚げ図」と「義士大観 仙石伯耆守邸での赤穂義士の図」である。なお、碑の最後に中央義士会の名が入っているが、碑の製作時はまだ一般社団法人ではなかったので、単に「中央義士会」だけとなっている。是非なにかの折りに訪ねて見ていただきたい。



碑の前で 右側秋本日本消防協会会長、左筆者

## 令和6年 一般社団法人中央義士会活動報告

進藤 務

月 日	事 項	備 考
1月8日	臨時理事会	泉岳寺講堂
1月20日	田町リープラにて会費請求等発送作業	役員
1月28日	赤穂義士引揚げコースを歩く会	中央義士会主催
2月4日	赤穂義士322回忌法要	泉岳寺 柿崎理事長他3名
2月25日	臨時理事会	泉岳寺講堂
2月25日	第1回忠臣蔵講座	泉岳寺講堂 講師蟹江参事
3月10日	浅野内匠頭長矩追憶の会 323回忌法要	泉岳寺
3月13日	イタリア大使館赤穂義士法要	イタリア大使館 柿崎理事長他
3月20日	切腹地公開	旧細川邸 大石内蔵助ら切腹地
4月1日	一般社団法人として中央義士会を継承	一般社団法人中央義士会
4月6日	高松桜まつり切腹地公開	大石内蔵助ら切腹地
4月7日	臨時理事会	泉岳寺講堂
4月7日	第2回忠臣蔵講座	泉岳寺講堂 講師荻原副理事長
4月17日	高輪台小学校泉岳寺忠臣蔵説明	泉岳寺 柿崎理事長他2名
5月12日	臨時理事会	泉岳寺講堂 理事
6月2日	第1回定時社員総会	泉岳寺講堂 柿崎理事長他
6月2日	第3回忠臣蔵講座	泉岳寺講堂 講師荻原副理事長
6月14日～16日	臨時理事会(北海道支部にて)・北海道義士会総会交流	北泉岳寺 柿崎理事長他支部長
6月30日	全義連会報39号発行 全国義士会連合会会報の発送作業	田町リープラ 役員
8月4日	臨時理事会	泉岳寺講堂
8月4日	第4回忠臣蔵講座	泉岳寺講堂 講師柿崎理事長
9月1日	臨時理事会・福本日南翁墓前供養祭・忠臣蔵絵巻内覧会	泉岳寺 柿崎理事長他
10月1日	小冊子「正史元禄赤穂事件」発売開始	泉岳寺
10月6日	12月14日赤穂義士追憶の集い発送作業	田町リープラ 役員
10月6日	第5回忠臣蔵講座	泉岳寺講堂 講師荻原副理事長
10月8日	イタリア大使館(東京都港区)イベント交流会	イタリア大使館 柿崎理事長
10月9日	日本消防協会訪問	荻原福理事長
10月17日	新潟イタリア協会創立25周年記念パーティ	ホテルイタリア軒 柿崎理事長
10月18日	堀部安兵衛納骨式(新潟武庸会主催)	長徳寺(新発田市) 柿崎理事長
10月27日	忠臣蔵検定事務局会合	泉岳寺講堂 柿崎理事長
10月27日	忠臣蔵検定セミナー	泉岳寺講堂 柿崎理事長
12月1日	再興第1会忠臣蔵検定試験	泉岳寺並に全国各支部にて実施
12月5日	会報76号発行 会報発送作業	役員 編集委員
12月13日	泉岳寺義士祭 切腹地公開	泉岳寺 大石内蔵助ら切腹地
12月14日	赤穂義士追憶の集い	泉岳寺
12月15日	泉岳寺義士祭 切腹地公開	泉岳寺 大石内蔵助ら切腹地

# 忠臣蔵検定の復活

柿崎輝彦

研究財団として活動してきた財団法人中央義士会の標準的な目標を設定すべく、成績優秀者に忠臣蔵博士の称号を授与するために、公認「忠臣蔵博士」称号試験実施委員会が設置され、平成十五年に第一回忠臣蔵博士試験が実施された。

受験を機に元禄赤穂事件の真実に接することで、事件に巻き込まれた多くの方々の立場や思いを理解し、デマや創作に惑わされることなく元禄赤穂事件への興味を深めるきっかけになることに期待を込めた。当初の目的が、忠臣蔵博士認定のためのものであり、極めて難易度が高かったことから、平成十七年には忠臣蔵博士に準ずる忠臣蔵通検定試験が開始され、平成二十二年からは忠臣蔵通二級検定に名称変更し、更に平成三十年には忠臣蔵通二級検定に準ずる忠臣蔵通三級検定試験を導入したものの、コロナ禍を機に試験は中断していた。

この度、一般社団法人取得を記念した特別企画として忠臣蔵検定を復活。十二月一日泉岳寺講堂および全国の各支部で試験を実施した。

この会報が刊行した頃には、高得点者に与えられる忠臣蔵博士や忠臣蔵講師を認定された方がおられるはずである。

地域	氏名
杉並区	伊地知 孝雄
赤穂市	井田 佐登司
海老名市	伊積 由香
港区	小川 進吾
中野区	加藤 弘志
西東京市	加藤 裕子
京都市	加藤 由美子
港区	金光 亮典
安中市	小林 進
豊中市	権田 智宏
練馬区	佐々木 貴康
新宿区	里見 ふみ子
江東区	田中 遥
横浜市	坪井 宣明
所沢市	富澤 久美子
赤穂市	目木 敏明
大田区	毛利 園子
須賀川市	横川 與一
葛飾区	横山 明子
横浜市	吉澤 秀子
京都市	谷口 真司

## 新入会員

## 編集後記

今年の夏は観測始まって以来の高温となった。お年寄りが熱中症で亡くなられたというニュースが毎日飛び込んでくる。一方電力対策で節電も言われ、エアコンを点けて良いのか迷う人もいただろう。省電力より自分の身が一番。当会の会員も高齢の方が多いので心配だが、他人事ではないことにこの一文を書いていて気が付いた。

中央義士会は、今年の四月から一般社団法人として、熱い活動を開始した。春から活動の範囲を広げ、これまで東京で行ってきた理事会を、他地域でも行うことにし、手始めに北海道支部の北泉岳寺（北海道砂川市）で開催した。また、理事会もリモートで出来るようにした。一般社団法人としての第一回社員総会も開催、数年ぶりの忠臣蔵検定試験も開始した。

公益財団法人日本消防協会の日本消防会館が建て直して九月に完成し、そこに当会が製作協力した忠臣蔵碑も迫力満点で設置されている。都内にいくつかある忠臣蔵の史蹟の一つとして、観光地になっていくと期待される。

当会と泉岳寺とがコラボした、柿崎理事長の本も泉岳寺から出版され販売が開始された。売れ行きは絶好調。

編集 萩原 栄  
 校正 柿崎輝彦 進藤 務  
 蟹江 元  
 印刷 (株)正大印刷社